

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## みんなく若手研究者奨励セミナー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 京之介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005841">http://hdl.handle.net/10502/00005841</a>

# みんぱく若手研究者奨励セミナー

文 平井京之介 ひらい きょうのすけ

研究戦略センター教授。専門は社会人類学専攻。主な編著書・論文に、『村から工場へ—東南アジア女性の近代化経験』（NTT出版 2011年）、『実践としてのコミュニティ—移動・国家・運動』（編著 京都大学学術出版会 2012年）、「運動する博物館—水俣病歴史考証館の対抗的实践」『国立民族学博物館研究報告』（2012年 36巻4号）など。

## はじめに

2012年11月28日（水）から30日（金）までの3日間、国立民族学博物館（以下、民博）2階第6セミナー室において、第4回みんぱく若手研究者奨励セミナーが開催された。このセミナーは、若手研究者による共同利用を促進するために、博士後期課程の大学院生およびポスト・ドクターを対象に参加者を募集し、毎年この時期に開催するものである。今回のテーマは「包摂と自律の人間学—空間をめぐる」であり、関東から9名、関西から2名の参加があった。

セミナーは民博が研究戦略センターの事業として実施するものである。私は機関研究員の河合洋尚氏、加賀谷真梨氏とともに昨年度の企画・運営を担当した。本稿では、私個人の立場で、今回のセミナーの内容と意義を紹介し、今後を展望する。

## テーマ設定

準備段階で苦労したのが、テーマ設定である。若手研究者にアピールする最新流行のテーマがよいが、我々が扱えないようだ困る。かといって、テーマがつまらないと応募が集まらない。ここ数年は、民博の2つの機関研究領域を交互に取り上げてきた。機関研究は民博が組織をあげて取り組む研究プロジェクトであり、いわば民博の研究の顔となるものだ。これはセミナーで扱うにふさわしい。こう考えて、例年に倣い、「包摂と自律の人間学」というテーマに落ち着いたが、まだ少し大きすぎる。なにを求めるのかわからないし、議論をしても焦点が定まらない

いだろう。そこで、「空間」や「場所」に焦点を当てて、マイノリティの自律性や社会的公正の問題にアプローチする研究を募集することにした。

## セミナーの内容

セミナーは3部から構成される。第1部は1日目の午前中で、民博教員による講演である。今回は、「包摂と自律の人間学」領域で研究プロジェクトの代表者をしている鈴木紀先生、鈴木七美先生、齋藤晃先生にそれぞれ20分ずつ自分のプロジェクトを紹介してもらった。

第2部は1日目の午後から3日目の午前までで、セミナー参加者による個人研究発表である。一人の発表に30分、質疑応答に20分をとった。そして最終日の午前中を総合討論に当てた。

今回から民博教員のセミナーへの参加のしかたを少し変えた。岸上伸啓先生、横山廣子先生、三尾稔先生の3人にコメンテーターを依頼し、個人発表と総合討論のすべてに参加してもらった。そして、あくまで参加者同士が互いに刺激し合って議論を発展させることを目標にし、それをコメンテーターが手伝う、というかたちをとった。この試みは概して成功だったと思う。また、コメンテーターの他にも、10数名の民博教員がそれぞれ関連分野の発表を聞きに部分的に参加してくれた。

2日目の午前中には、個人発表を一時中断して、玄関前広場でおこなわれたアイヌの人びとによるカムイノミの儀礼を見学した。これは民博にとって、また日本人類学にとって、とても貴重な儀礼である。齋藤玲子先生に参考資料を



発表日	第4回みんぱく若手研究者奨励セミナー発表タイトル	氏名
2012年 11月28日	南アフリカにおける分断統治とアフリカ人の主体的な民族意識の表明—クロムドゥラライ住民にとっての『ソト人であること』	河野明佳
	ナイロビ・スラムの『学校』—場の自律性と地域との関係	井本佐保里
	区切られる空間、つながる場所—タイ海洋国立公園におけるモーケンの潜水漁の動態	鈴木佑記
	ハイブリッドからモノカルチャーへ—タイ北部農村社会における HIV/AIDS 感染者組織の生成と転回	日野智豪
	難民から市民へ—ビルマ難民の移動と定住	久保忠行
	『循環する場所』としての枯木又—エコミュージアムとノから大地の芸術祭へ	兼松芽永
	過疎・高齢化地域における社会的選択としての複数居住	渡部鮎美
	空間から場所へ—マレーシアの住宅団地における華人コミュニティ構築の事例から	櫻田涼子
11月29日	グローバルメディアと民俗知識	小林宏至
	ポリティクスをしないことによる『自律性』—中国雲南省昆明市回族社会のインフォーマルな宗教活動の事例から	奈良雅史
	内からの包摂を維持する試み—メキシコにおける性的少数者の教会の包摂と自律	上村淳志

つくってもらい、伊藤敦規先生に儀礼の意味についてセミナーで解説してもらった。

第3部は3日目の午後で、民博の共同利用制度の説明と施設の紹介である。私が民博の大学共同利用制度について、河合氏が機関研究員や外来研究員、共同研究（若手）など、若手研究者向けに実施している制度について説明した。その後、1階から4階まで民博内を私が案内した。例年通り、バックヤード（収蔵庫）・ツアーが参加者にもっとも人気があった。

コメンテーターによる審議の結果、優秀発表者として久保忠行氏が選出され、閉会式で表彰状と記念品が授与された。論旨の明確さや研究の発展性が評価されたようである。セミナーで賞を授与することには賛否があるが、参加者の動機づけになるし、セミナーに緊張感をもたらしていたようにも思う。

### セミナーの意義・課題・展望

若手研究者奨励セミナーの意義は、第1に、若手研究者に成果発表の機会を与えることであり、第2に、若手研究者が関心を共有する同世代と出会う場をつくることであろう。

しかし本音をいえば、若手研究者が民博と出会う場にすることが最重要である。民博というコミュニティ（施設・研究・制度・研究者）を知ってもらい、コミュニティに参加する楽しさを知ってもらい、そして将来の参加につなげてもらうのだ。参加者のなかから、近い将来、『国立民族学博物館研究報告』に投稿したり（参加者全員に投稿権が与えられた）、民博のシンポジウムに参加したり、機関研究員や外来研究員、共同研究に応募したりする者がかならず出てくるはずである。さらに民博教員には、若手研究者やその研究内容について情報を

集め、共同研究やシンポジウム等にさそう相手をみつける機会にもなるだろう。

セミナーの課題はたくさんある。第1に、若手研究者のあいだでセミナーの知名度を上げることだ。とりわけ、東北や九州など、若手研究者が集まる機会が少ない大学の若手研究者に積極的な宣伝活動をおこないたい。第2に、参加者が非常勤の講義を休まずにすむ日程を設定できないか。講義が障害になって参加をあきらめる若手研究者も多いと聞く。週末の開催も一案だが、それだと館内での協力が得にくくなる。大学が長期休暇になる平日に開催する可能性を考えたい。第3に、総合討論をいかに充実させるか。かならずしも問題意識や方法論を共有していない参加者をうまく巻き込んで、総合討論を充実させる工夫を今後も考えていく必要がある。第4に、民博教員からさらなる協力をいかに得るか。若手研究者が発表したときに、同じ分野の民博の研究者からコメントをもらえたら、どれだけうれしいことだろう。少なくとも同じ研究地域の発表には教員に参加してもらえるように続けて館内広報に力を入れていきたい。

最後にひとつ提案する。セミナーの成功は、若手研究者のニーズと民博のコミュニティとをいかに結びつけるかにかかっている。こう考えたとき、機関研究のプロジェクト代表者がセミナーを主催するというのはどうだろうか。自ら基調講演をおこなうとともに、若手研究者を公募してシンポジウムを開催するのである。運営はいままで通り研究戦略センターがサポートする。こうすれば、若手研究者をより有機的に民博のコミュニティに巻き込むことができるのではないか。ただし、これを実行に移すには、民博の機関研究プロジェクトが、もっと若手研究者にアピールするようなものにグレードアップする必要があるだろう。